

## H・ピレンヌに據る中世 ネーデルラント經濟史の概観

小野 高 治

ネーデルラントといへば、地理的な用語としては、今日フランス、ベルギー、オランダに分かれている所のシエルト河、低部・中部ミーズ河及び低ライン河の盆地をさすのであるが、この地方の中世より近世にかけてのヨーロッパ經濟史上に占むる地位の重要性は、その地理的自然的条件に徴するのみでも極めて明白であろう。即ちフランスの商業樞軸及び北獨の大平原の夫々の末端であると共に、英國にすつと海岸線に沿わせたその地位は西歐交通の會交點として早くから注目され、運輸路の集中を見ると共に、商業上の魅力横溢せる中心地ともなり、早くから輸出産業の發生を見ている。かくて既に十世紀頃には流通の觀點からも、生産の觀點からも、はつきりとした國際的性格をもちつつ繁榮を開始するのを見るであろう。然もそれが單に自然的地理的必然のみによつて決して説明し盡され得ない事はその後の推移を知る者にとつてはこれ又明白である。例えば大塚久雄教授の「序説」第一篇の和蘭經濟史に關する敘述は、部分的ではあるが、深い角度から南・北ネーデルラント地方の實際的盛衰の社會經濟的條件をよく浮彫にされている。しかし尙

ネーデルラントの社會經濟史に關して知られる所は必しも充分ではないのみか、大塚教授も指摘される如く（「系譜」弘文堂版序）尙今後の研究に期待されている點が極めて多い。そこで以下一應の通説を顧みるつもりで、ピレンヌの該博な造詣を基として彼自ら簡單にスケッチした「中世ヨーロッパ經濟史に於けるネーデルラントの地位」なる論文（一九二九）を紹介する。勿論ピレンヌ説には色々の難點もある事は周知の如くであるが、ここでは専ら彼に忠實に紹介するに止める。

(The Place of the Netherlands in the Economic History of Medieval Europe, The Economic History Review, Vol. II, No. 1 (1929). 尙他に従り Social and Economic History of Medieval Europe, Chap. VII. を参照)

### 一

ネーデルラントの國際的地位は、既にローマ征服以前から英國の錫がここを経由してマルセイユへ運ばれた事や、ベルギー族の金貨がゴール地方のケルト族の金貨と同様、マケドニアの金貨の模倣である事によつても明らかである。紀元前五七年——五一年のローマによる國の併合は、種々の經濟生活の慣習を導入した。農地はかなり開墾され、その開墾された地域は、この時代から十一世紀の終りまで變化がなかつた様である。道路はアウグスタス (SIB.C. — I.A.D.) の治世以降建設され、南方との地域を結び、それによつて地中海文化と接觸する様にな

つた。後世には決定的な都市文化を形成するこの地方も、當時はまだ殆ど都會らしいものとしてなく、ただ小さな田舎町が散在するのみであつた。トングレ Tongres ツルネー Tournai ババイ Barai カセル Cassel なども當時は單に第二次的な行政中心地にすぎず、ライン河やモーゼル河沿岸の都市に匹敵し得なかつた。それでも人口はかなり多かつた様で、その多くは農民であつた。又ハイナウルト Hainault フラバンド Brabant ルクセムブルグ Luxemburg やナムール Namur 地方に於て發見された多くの村の遺跡はその當時の調度様式がイタリヤや東方の工藝品に富んでいる喜や、イタリヤやアフリカから輸入された大理石が裝飾に用いられている事を明らかにした。畜産はかなり行われ、ベルギーのハムや鷺鳥はローマの「美食家」に喜ばれた。一方穀物の販賣もライン河に沿つて運営した軍隊のおかげで確保された。かかる純粹な農業にならんで農村工業 (rural industry) もかなり活潑に存在した。例えば眞鍮製造はミューズ河上流の沿岸で行われ、又サムブル Sambre 及びミューズ河間には鍛冶が盛んであつたし、ナムール周邊ではガラスが製造された。又陶器業はコーマ範域の中で最優秀なものとして歓迎されているのを見る。しかし何といつても重要なのは毛織物工業であるが、特に海岸沿いの平原では繁榮し、Cloak (sage) や Mantle (jurt) が既に製造され、アルプス越しに輸出された。凡てこれらの證據はベルギーがその産業生活を、ローマに負うていた事を明白に結論するであらう。商業は陸路ではロ

ール及びイタリヤへ又海路では英國へ向けて營まれた。Boulogne は地中海からの道が海(ドーバ海峡)に出會う所であるが、重要な貿易中心地であり、又ドムブルグ Donburg やメルト河口でも、航海の守神なるケルトの女神ネハレニアを祠つた遺跡が發見されている。マイエンス Mayence でその仕事場を営つた Classis Germanica はニムペーゲン Ninwegen、ライデン Leyden、カトウエイク Katwijk、ラムプスト Rumpst でその支店を建てた。

五世紀においてフランク族がネーデルラントを占領したにも拘らず、この經濟生活を破壊しなかつたのは極めて意義深い。勿論侵入に伴う様々な災害や掠奪がかなりの衝撃を與えた事は否めないが、その従前の基本的な性格はクロビスの治世からメロヴィンが朝のゴトルに於て、再び現れる事に注目せねばならぬ。證據は必しも多くないが、凡そ七〇〇年頃迄地中海商業は尙凡ゆる種類の東方(オリエント)の物産を歐洲各地に運んでいた事が確められている。エザプトから輸入されたペピルスは非常に豊かであつたから、それはカムブレイ Cantuari の市場や他の多くの市場に規則的に運ばれた。造船及び海運業はマエストリヒト Maestricht 及びニトレヒト Utrecht 近くのドウルスステッド Druustede でその重要性を保つた。又メロヴィンガー時代にこの地方で多くの貨幣鑄造がなされた事から判斷して、ユイヒフには眞鍮工業があつたに違いない。又その後九世紀に於て非常に繁榮を見る毛織物工業がそれ迄からすつと根

をはり續けていた事も明らかである。

1) F. Cunont, *Comment la Belgique fut romanisée*, xxvi  
(1914)

二

カロリング時代の始りと一致する回教の地中海地方への侵入によつて惹起された重大な危機は、この地方に直接的な影響を與えた。即ちゴールの海岸に沿つて地中海を閉塞し、且つゴールとシリヤやエヂプトとの關係を断ち切る事によつて、それはローマ帝國の衰退の後も尙北海地方に進出して依然活況を呈していたマルセイユからの商業の流れを干上らせた。シールマニユの治世以降、衣服は絹でつくられなくなり、又香木やガゼ地方のブドウ酒は食品リストから消えた。食品がもはや土産物以外には含まれなくなつたと同様麻や毛織物以外の衣類も着られなくなつた。然もこの様な客觀事情の變化は、フランダール人が祖先以來長く従事してきた毛織物工業の繁榮に向させた様である。九世紀始め以來この産業が異常な普及をとげた事は明らかで、それはカロリング朝のもとで輸出貿易を營むに足るる唯一のものであつた。當時の文書にてくる、所謂のフリジヤ織 (*Palla fresonica*) は勿論フランダールに於て織られたものではあるが、この名稱は商業史でよく見られる様に、それを運送した商人に因んで名づけられたものである。即ちフリジヤ織はフリジヤ商人の舟によつてツウルステッドやユトレヒトからライン

H・ビレンヌに據る中世ネーデルラント經濟史の概観

の谷を下つて各地に運ばれたのである。そしてこれらの毛織物は海岸沿いの農民によつて作られるか、或いはシエルト盆地の大所領地の *synodus* 各々で婦人仕事場 (*women's working houses*) で作られたものであるが、その量においても、その品質や色の美しさに於ても、比類がなかつた。シャルマーニユ大帝がカリフの Haroun al Rashid に貢納の返禮として送つたのもこのフリジヤ織であつた。フランダールの織物工業がその時以來中世の終り迄、奢侈工業の凡ての特徴を誇り得り得たのはフランス—ローマ (*Gallo-Roman*) 技術の保存によるものであり、特に縮絨及び染色行程の技術保存のおかげであつたという事が考えられねばならぬ。この時代におけるその素晴らしい榮は、サラセン人の地中海の閉塞が世歐を純粹の農業文化に窒息せしめた事と極めて對照的である。即ちイタリヤ及びネーデルラントを除いては當時のヨーロッパの經濟は自給經濟 (*self-sufficing economy*) であつた。それは村落法令 (*Capitulaire de Villis*) の規定による大所領組織の古典的形態の再現であつた。市場がなかつたので、いかなる土地もその所有者及びその土地を耕す農奴の家族の必要以上のものを作らなかつた。即ち各自の消費に必要なだけを生産する事に意を用いたのである。シャルマーニユ治世以來、銀貨が従前の金貨に代替されるようになったのみならず、地代は不斷に徴收され、又凡ゆる種類の封建的負擔 (*taxes*) は現物で收められる様になつた。ネーデルラントも亦この退歩經濟 (*retrogressive economy*) を採用する事を

強いられた事は明らかである。例えば葡萄酒の耕作が不可能なこの地域において殆ど凡ての修道院がライン河やモーゼル河やセーヌ河などの流域の葡萄酒の出る土地の寄進を求めたという事實は普通の商業手段によつては葡萄酒を得る事が不可能であつた事の證據である。

然し乍らネーデルラントは、その特權的な位地が幸いして、この市場なき經濟組織に全く閉ぢこめられんとする事から救われた。種々の障害にも拘らず、一定の商業活動がフリジヤ人によつてヅウルステッドやユトレヒトで行われたのみならず、カナンヒ (Canche) のクエントビック港でも活潑な商況を呈していた。これらの地方と北方との關係の程度が如何様なものであつたかは、この地方 (ネーデルラント) の貨幣がイングランドやバルト海岸ですら發見されている事によつて明らかに賞證される。カロリンガ諸王によつて鑄造された唯一の金貨が、ユズ (Uzes) 地方の金貨を除けば凡てフリースランドに於て鑄造された事は特徴的である。海上商業の影響は、當然内陸に及され、その反響は河川輸送を發展させた。Pottus 即ち商品集積所 (depôts) 及び取引指定市場 (Stapels) は大きな河の沿岸に沿うて存在し、又シェルト河沿岸のツルネーやバレンシエン (Vla-Jenloemes) やウィーズ河畔のマエストリヒトは商人及び造船業者の集合地としてずつと長い間重要な地位を保つた。かくてネーデルラントはローマやメロヴェインガー時代の様な地中海商業の最北端の焦點である事をやめたものの、然もその毛織物工業

と諸川及び北海に沿う商業のおかげで、アルプスの北部とは比べものにならぬ活況を續けた。もしも九世紀後半にノルマン人の侵入によつてもたらされた破局を免れる事ができていたら、彼等は漸次商業活動を擴張し、西歐のルネッサンスをかなり早めていたかもしれない。

九世紀に英國及び大陸へノルマン人が突如下つてきた事の原因は尙よく知られていない。それがサラセンの侵入の結果と考える事は充分可能性がある。何故ならスウェーデン人がマホメットのアジアと、ボルガ河及び裏海を通して、早くも八世紀頃に商業關係を維持していた事が確かな事によつても、サラセン人が相當にバルト海の航海に乗り出していた事が信じられるからである。そして彼等の見本に促されてデーン人やノルウェー人は順次に商業の探險や海賊に乗り出したが、その向う所は當然に英國諸島や北海及び大西洋に面する大陸の沿岸であつたと考えられよう。それはともかく、これらの地方を彼等が侵した被害は莫大なものであつた。その大河口が廣く敵の艦隊に開いているネーデルラント地方は他國よりも以上に彼等の侵掠によつて荒された。凡ての修道院や港は、却掠されて灰燼に歸した。クエントビックは消滅してしまつた。ヅウルステッドは引つづき四回にわたり侵略された。この變疾の攻撃が止んだのは八九一年のルーベインでの戦いによつて勝利が得られてから後の事であるが、もうその時迄には既にこの地方は完全な灰燼状態にあり、彼等に充分魅力的な掠奪物を與へ得ない状態にあつ

た。従つて商工業がその當時暫く衰微した事をももたせ、遂に弱くした。しかしこの地方の奪まれた地理的地位は、いつまでも長く衰微してゐる事を許さず、復興も亦早かつた。丁度五世紀のフランク侵入の後と同じく、この九世紀のノルマン侵略後まもなく回復した。

1) H. Pirenne, "Draps de Frise ou draps de Flandre," in *Verleijahrschrift für Sozial und Wirtschaftsgeschichte*, (1909) 308 seq.

2) H. van Werveke, "Comment les établissemens religieux Jauges se procurant-ils du vin au haut Moyen Age," in *Revue Jauges de philologie et d'histoire* (1932) 613 seq.

3) M. Prou, *Les Monnaies carolingiennes*, xxvii, (1896)

### 三

而もノルマン人達自身がこの回復に貢献しなかつたかどうかも考へてみる必要がある。彼等の侵入は彼等がやがて十二世紀に遠達ハンザによつて追出される迄北海やバルト海でふるつた海上支配時代への暴力的先づれにすぎなかつた。彼等が軍事行動の代りにもつと平和的な活動を始めるや否や、彼等は商人として、かつては海賊として現れたネーデルラント諸川に沿つて現れた。十世紀に於て彼等がエントレヒト及びフランダールで貿易をいとなんだ事は確認されている。ネーデルラント地方の多くの場處で鑄造された貨幣が、この時以後スエーデンを越えてシ

エントラング(Gotland) ニーランド(Niland) から更にポーランド迄進出し始めるのは、多分ノルマン人によるものと思われ。しかしこの國の住民自體も亦まもなく、自然が彼等に豊かに恵んだ運交の便を利用し始めた。ミーズ河の流域の住民は河を下つてライン河との接合點まで至り、ラインを遡つてコロニーからグロスターへと旅行し、今やユイやデインで復活しつつある金屬工業の爲に必要な銅を入手した。又フランダール海岸の側では、商業が再びフルージュ、即ちツピン灣に據つて成長し始めたこのフルージュとテムズ河口との間に再開された。ロンドン市場議院(九九一—一〇〇二)はフランダール人によつて賣られた商品とリニージュ、ニメル及びユイの商人の名前を記している。後者の商人がやつてきた目的が眞鍮工業に必要な錫を賣う爲であつた事は明らかである。又前者のフランダール人の場合は、彼等がネーデルラント産の毛織物を賣込み、その代りにその原料たるイングランド産の上質の羊毛を賣こむ事にあつた事は明らかである。かくしてこの地方の經濟生活の國際的性格は全く復活した。ネーデルラントが外國と當んだ商業、即ち一方で對良工業の生産物を輸出し、他方原料を輸入する商業は、餘りにも通説となつてゐる見解が、ヨーロッパの經濟的復活を進めた原因を地方市場(local market)間の小取引(Petty Chaftehn)に求めるのは非常に違つた相貌を呈する。實際においてはネーデルラントでもイタリーでもこの復活は遠隔商業(Jong distance commerce)によつて齎されたものであつた。

正確な知識が缺けている爲、十世紀の旅商人や航海者の身分は假定にのみ止る。彼等が始めは若干の修道院の食糧供給の爲の使用人であつたのが、次第に地位を高めて、遂に自分の計算で貿易を営むようになったものとする見解は何の根據もない。

この見解に對する反論はネーデルラントの場合は益々有力である。蓋し修道院の爲に働く商人達はそこでは見られないからである。ネーデルラントの初期のメルカトールに關する凡ての資料は、彼等がマナー權力から獨立してした事を證據づけている。然らば彼等は如何なる階級から出てきたのであろうか。それは正確には解らないとしても、資料の語る所では、ともかく彼等が所謂の *vagantes* や *paupers* と呼ばれる要するに土地を缺き、生活の爲に社會をさまよう放浪者の出であるらしい。彼等の者は施して生活し、又他の者は軍隊に雇われた。しかし又ある者は巡回貿易商 (*wandering traders*) の生活に入る機會を得た。彼等は大膽で企業心に富んだ冒險家と見なされたに違いない。彼等に資本はなかつた。彼等の間には貿易をする爲に財産を賣つて資本を得る地主を一人も見出し得ない。従つてここに信用のごく原始的な形態が彼等の行動の爲に成立したと思われる。又他の者は幸運をつかんで世に出る基礎を作り上げる事ができたかもしれない。しかしとりわけ重要な事は、彼等が單獨では働かなかつた事である。實際貿易手段程非個人的なものではなからう。貿易は人々の結合のもたらす共同成果である。商人ギルドは既に十一世紀に於て確立せられていたのを見るが、そ

れは商業の復活と共に相違ない。というのはこの商業は海路にせよ、陸路にせよ、隊商 (*commerce of caravans*) であつたからである。メルカトールが市場に現れたのは、武装をして嚴格な訓練をうけ、*caravans* と名づけられた隊長をもち、自己の旗をふつて現れるのであつた。彼等の名稱がギルドと呼ばれようとする或はハンザ或は慈惠隊 (*caritas*) と呼ばれようとする等の外觀や目的は常に同一であつた。商業活動が最も激烈になつた時に、彼等は分業 (*specialization*) し始めた。十二世紀に於て英國と貿易を営んだ凡てのフランダース人の商人グループは「ロンドン・ハンザ」の名をもつて大きな組織に結合した。

領主達はこれらの商人達を大いに援助した。何故なら商人達は道路や河に屢々課せられた交通税を支拂う事によつて領主の財政に大いに貢獻したからである。そこで領主達は彼等に特別の保護を與え、これらの有益な旅行者を害する事に對しては死刑を課する旨公布した。更に商人達は王室裁判所に直接訴える事ができた。そしてマナー裁判所は彼等を召換する事ができなかった。というのは商人はどこへ行こうと自由人として扱われたからである。もともと彼等の多くは冒險を求めて父の家を出た農奴の若い息子であつたにも拘らず、かかる待遇をうけたのである。第一、彼等の素姓について故郷のマナーの外に誰が知つていようか。彼等の放浪生活は凡ての素狀を消し去り、誰も彼等の市民的身分を知らなかつた。従つて彼等は自由人として扱われた。織農の身分は想像もされなかつた。従つて極めて注

意あるべき重要な事は、商業は最初から人格的自由 (personal liberty) の制度の下に發達したという事である。

商人の旅生活は彼等がそこに集合する多くの固定した駐在地を不可缺のものとした事はいう迄もない。即ちかかる旅生活にも冬季の寄寓所として、貨物の集積所として、又船や車のかこい場としての半永久的なセンターを缺く事はできなかったのである。その上これらのたまり場の位置が商業の必要に適合せねばならなかつた事、即ちその場所の地形や岸壁の高さが、通行や人々の集合に便である様な所に固定されねばならなかつた事は明らかである。かくて十世紀の中に商人の集中は激しくなつた。例えば、リール (Lille) 河及びシニルト河の接合部 (Ghent) や、ツヴァイン河口の蕃點にあるブルージュ、シニルト河の航行可能の終點たるカンブレ (Cambrai)、『アア (Aa) 河のサン・ドメール (St. Omer)』、『デウル河のリール (Lille)』、『スカルプ河のツヴァイ (Douai)』、『コロニーユから海への道がミューズ河と交叉するマエストリヒト』、『ミューズ河とウールス (Ourthe) 河の接合點にあたるリエージュ』、『ミューズ河上流のユイ及びディナン (Dinant)』がこの集結點である。そしてこれらの商人の集結地は Portus という特徴ある名前をもつた。即ち取引の爲の港 (port) 集積地 (depôts) 基地 (bases) の意味である。而してその名前こそはそれらの場所の純粹に商業的な性格をよく物語るのである。又それは都市 (urbs) を意味するフランドル語の Port の語原をなしている。かくてたとひ全ての證據がそ

れを指示しないとしても、ネーデルラントの諸都市が元來その發展を商業に負うていた事は餘りに明白である。フランスやライン河やダニューブ河の沿岸に於ては、都市生活の復活が、かつての古いローマ諸都市に於いて殆ど例外なしに起つたが、ネーデルラントではこれに反して最も古くそして最も活潑な中心は一般に新しい諸都市に於いて見出される。たゞツウルネー及びカムブレは中世以前からの都市であるが、他の場所ではどこでも都市の萌芽を形成した商人のグループは完全に古代の傳統から斷絶してゐた。しかしその事は必しも都市が處女地に達せられた事を意味しない。Portus が成長した所ではどこでも既に訪留された西廓 (enclos) があつた。それはノルマン人の侵入の後、渡入達の爲の要塞として建てられたもので、商人が集中したのには、これらの "burg" の圍の周圍であつた。しかし乍らもしこれらのブルグが都市を發生させたと思つても、全く誤つてゐる。都市はブルグに近接してゐたけれども、ブルグから發展したのではない。兩者の區別はかなりはつきりしてゐる。なぜならブルグは軍事目的のみを企圖してゐた。そして騎士の守備隊は近隣の土地の收入で生活して居り、ブルグの大きさは殆ど固定してゐた。然るに Portus の方は商業的目的のみで成立し、その増大する活動が新しい商人を引つけるに従つて發達し、やがて舊い封造的な城壁とその新しい區域 (quarter) をもつてかこみ、それを四方で封鎖し、そして遂にそれを吸収した。十二世紀ですらもこのプロセスは起つた。かくて今や彼

に立たなれば破壊され、建築用地に變つた。商人の Portus は封建的 Burg を吸収し、遂にはその Burg なる名前を自ら使用する様になつた。元來商人の居住地は盜賊から守る抗柵 (Palisade) でかこまれていた。そしてまもなくこの防禦は、常に擴大される濠をめぐらした石の城壁 (rampart) に代つた。それ以來その中心に古く Burg が濠壕になつて Portus が、それ自身 Burg となつた。そして十一世紀の終りからその住民は新しく市民 (burgenses) の名を生み出した。以上の如き奇妙な意味の變化によつて、商業から生れたブルジョワは、封建的な用語言を濠壕とした Burg なる名前に由来するものである。

- ① Al. Bugge, "Die Norddeutsche Verkehrswege im friihen Mittelalter," Vierteljahrschrift für Sozial und Wirtschaftsgeschichte (1906), 227 seq.
- ② Liebermann, Die Gesetze der Angelsachsen, I, 232
- ③ H. Pirenne, "La hanse flamande de Londres," in Bulletin de l'Académie Royale de Belgique, Classe des Lettres (1809), 65 seq.
- ④ H. Pirenne, "Les villes flamandes avant le XIIIe siècle," in Annales de l'Inst. et du Nord (1905), 9 seq.

## 四

十二世紀の始め、新しい外的衝動(十字軍運動)がネーデルラントの經濟活動を搖ぶつた。サラセンによる地中海の遮斷が

南方諸國とネーデルラントとの關係を止めたのと同様、この新しい衝動は基督敎國による地中海航海の復活を起させた。ネーデルラントはイタリヤと北地の商業の會交點となつた。そしてその状態は中世の終り迄續く事になつた。一二七〇年以前にイタリヤのロンバルド商人はフランドルの大市にきていた。そしてツールー(Tournai)イーブル(Ypres)メンネ(Messines)リール(Lille)及びヅウアイに立つた市に——その市の重要性は十三世紀にシヤンパーニの有名な大市が奪う所となつたが——一重要性格を與えたのは實にロンバルド商人の存在であつた。しかもヨーロッパ商業の國際的中心がやがてシヤンパーニに移つてもフランドル地方とイタリーとの密接な關係を少しも阻害せず、むしろ却つて彼等が中心であつたヨーロッパ商業の運動を互いに接觸させる事により双方に利益を與えた。イタリヤ人は毛織物を買はんにフランドルへやつて來、その支拂はシヤンパーニの市での取引狀(fair letters)となされた。又フランドル人は逆に彼等の物産をトロイ(Troyes)やプロ文ヌ(Provins)やラグニー(Lagny)やブル・ヌル・マウヌ(Bur-sur-Aube)へ賣りに行つた。そしてこの事が彼等を益々商業の一般的流通に於いてなくてはならぬものとした。シヤンパーニの市はフランドル商人に直ちに手形交換所(clearing house)として、又その貿易の爲の新しい市場として役立つた。

十二世紀に於けるその經濟活動の増大は、商人階級間に相當の巨商を産み出した。Gasta episcoporum Cambracensium の中



あるヴェリムボールド *Wernhold* の記録から、大財産が獲得された方法と資本投資の性質を我々は知つてゐる。その記録によるとヴェリムボールドは無一物から出發して、ある富めるブルジョワの使用人となり、その仕事の監督を命ぜられ、驚くべき成功をしてその主人の娘と結婚した。彼が商業で得た利益を彼は土地の購入と都市の貨地に投資し、かくて大土地所有者となつた。しかしこの様な経路は多かれ少かれ他の巨商にも共通する。事實第十三世紀の始めは、土地は金持の商人、即ち新入りに所屬した。彼等に當時の文書は不動産家 *homines hereditarii* なる特權的な名前を與へてゐる。しかし投資對象は單に不動産ばかりではなかつた。サン・トメールのウイリヤム・ケイド *William Cate* の様に、或はガンのシモン・テフィール *Simmon Saphir* やサロモン・リンダシット *Salmon Kinyish*、或はアラヌ (*Aras*) のルーチャルド *Louchard* の様に多くの人々は特に金融に投資した。彼等は英國王やフランダール伯や、封建領主や、借金を求める都市に相當な金額を貸しつけた。彼等が大いに競つて慈善的寄捨をなしたのは、いう迄もなくこれらの取引が高利の名の下に教會によつて激しく批難される事に對する赦しを得る爲であつた。ヴェリムボールドはカムプラーの門の一つを寄進して贖罪したが、他の者は病院を建てたり、養育院を建てたりなどした。十三世紀の中頃、イタリヤ人がネーデルラントに導入した交換及び信用過程の改善は、ネーデルラントに對し土着の金融業者を起す事を可能ならしめ、その時以來その

國の資本家は單に金融のみに手を出す様になつたが、やがて彼等も當時ロンバルド商人或はカホリシン (*Calochines*) なる流行語で知られてゐた、イタリヤの高利貸商人によつて全く併呑された。フランダールに、又暫くしてネーデルラントの各地方にはイタリヤの金貸業者が澤山居たが、ユダヤ人はこれに反して非常に少かつた。經濟的により活潑な地方にユダヤ商人が少かつた事は奇妙である。ユダヤ人はビヂネスには全然つかず、ただごく小さな高利貸商となつたのみである。一二六一年、ブラバント公ヘンリー三世は、彼の公國からユダヤ人を追放する事を命じた。しかし彼の死後寡婦となつた *Alde* 公爵夫人はこの規則を遂行せず、ユダヤ人に適用すべき適當な取扱い法をトマス・アキナスに相談してゐる。しかし一三七〇年に、不敬罪にひつかかつてユダヤ人はブラバントから追放された。それ以來彼等はネーデルラントでは殆ど記録されてゐない。その後は十六世紀に、全く違つた條件の下に、まずアントワープで、次いでアムステルダムで姿を現すのみである。要するにユダヤ人が演じた役割はこの地方ではとるに足りなかつたのである。

商業活動について上に述べてきた所の凡ては、いかにそれが工業とながつていたかを明らかにする。勿論商業を起させたのは工業ではなかつた。むしろその地方の地理的地位が商業の生起を必然化せずにはやまなかつたというべきである。にも拘らず、その國の工業生活が商業の出現を早め、その進歩に大いに貢獻した事も同様である。勿論ローマの技術的方法の

保存のおかげで、マニユファクチュアはその優秀さに於て群を抜いていた。フランダールの毛織物の場合が然る事は既に述べた。又ミューズ河流域で造られた眞鍮品が卓越していた事は、商業用語の中に、“dinanderie” (古雅な眞鍮製家具の名稱——小野註) なる語が導入されている事によつても證明せられる。假令ベルギーの土地が葡萄酒や鹽の如き商品を全く生産し得ず、それについては輸入を餘儀なくせられたとはいへ、この不利は他の工業生産によつて充分補われて餘りがあつた。そして輸出貿易は十世紀以後益々繁榮したのである。我々は更に土着工業の性質が海外から原料を輸入する事を必要とした事に氣づくであろう。この國は、ユイやデインンの金屬製造業者の爲に必要な錫も銅も産しなかつた。そしてそれらの原料はドイツ及び英國から輸入せねばならなかつた。毛織物工業は多分元々は土着産の羊毛を使用したけれども、まもなくそれを放棄して、より上質の、より軟らかな、英國産の羊毛を使用する様になり、英國産羊毛の中世に於ける主たる消費地は、フランダール地方であつた。かくてベルギーは十二世紀の初頃頃今日の狀態と同じ様な特徴を、即ち原料については外國に全く依存し、その爲に輸出によらずには國を維持して行けない工業國となつたのである。

工業の進歩は更に都市に工業を集中する結果となつた。ローマ時代には、又メロヴィンガー朝やカロリಂಗー朝に於いても毛織物工業は農村に於て營まれていた。そして當時はそれは婦人の爲の仕事で、農夫の妻や莊園の婦人仕事場 (hineoom) の

女婢 (ancillae) にまかされていた。しかし乍らその生産物に對する需要の増大に比例して、生産の立地はそれを買入れる商人が居留する Paris の方に移り始めた。そして男子が婦人に代つてその生産につく様になり、その時以來毛織物製造は一つの専門的な仕事となつたのである。同時にその技術も改善された。その反物の長さは最初は外套を作るに適した短尺物所謂 *pullia* に過ぎなかつたが、それを包裝したり輸出したりする爲にもつと長くする事が實際的である事が知られる様になつた。

又この十二世紀にもなれば都市に於ける毛織物工業の集中はもう誰の目にも明らかな既成の事實であつた。勿論それらの都市外の平坦な農村地帯にも少數の織布工が殘存してはいたが、十二世紀の終りからはこの僅かな競争の繼續すら禁止された。凡ての都市は織布及び毛織物商品の製造と關連した凡ての複雑な工程の獨占を獲得した。ただその行程中の紡績行程のみは都市以外で營まれた。即ち都市の織元達は、都市周辺の農夫の婦人に羊毛を與えてそれを紡がせた。そしてかつて織布工であつた婦人達は今や紡績工に變貌した。

十三世紀の半頃迄に、ネーデルラント地方はその後の全歴史を通じて一貫する相貌を呈した。即ちこの地方はすぐれて都市國家 (a country of town) となつたのである。アルプスの北部地方でこの土地程人口密集し、富み且つ活況を呈した國は當時どこにもなかつた。この點に於てフランドル平野は、ロンバルド平野を想起させるであろう。都市集中運動は二つの中心から、

即ち一つはミューズ河の流域から、又他はシエルト河流域から發展した。前者に於いては河を下るにつれ、ディナン、ニイ、ナミニール及びリエージュがあり、凡て金屬工業に従つていた。それに又商業都市のマエストリヒト、ユトレヒト及びヅウルレヒトがある。これに對し後者の地域では海岸沿いである事からより密な集中を示している。即ちベルンジェン、カムブレ、サントメール、リール、ヅウアイ、イプル、ガン、ブルージュが十二世紀の半頃から極めて活潑な中心地であつて、商業及び毛織物工業が共に發展して互いに助長し合つた。ミューズ地方とシエルト地方との間は、最初は殆ど關係なく隔離してゐた。後者は海に直し、前者はライン及び獨逸に向つていた。しかし十二世紀の中にフランダー地域の繁榮はミューズ河に接する地方の産業を引きつける様になり、その引力はライン地方迄及ぶようになつて、ネーデルラントの全ての商業は益々そこに、即ちもつと嚴密にいえばブルージュの港に集中し、ブルージュの重要性は十三世紀中に著ろく成長した。ミューズ河から海への商路のおかげで、二つの地方の間に位するブラバント地方は復活し、次第に諸都市がその方々に勃興した。即ち一一五〇年頃にアントワープ (Antwerp)、マリン (Malines) ブラッセル Brussels 及び特にルーヴェン Louvain は南方及び西方に於ける古い商賣と競争し始めた。

同時に第二次的都市で、都市生活が最初に芽生えた凡ての中心地域の周邊に、その國を貫ぬく道や河に沿つて、互に益々接

## II・ピレンヌに據る中世ネーデルラント經濟史の概観

近し乍ら成長した。それらはフランダーやブラバント地方に極めて多かつたから、十三世紀の中に都市人口は農村人口と同じ位か、或はむしろ多くなつた際である。そしてこの坩堝の主な都市は、その住民の數に於いて、西歐のいかなる所よりも群を抜いていた事は全く明らかである。その成長は一一〇〇年から一三五〇年にかけて特に著しかつたので、都市の周邊にめぐらす壁は三十年毎に擴大せねばならなかつた。當時の觀察者は、その壯大さにうたれて、その人口の重要性を素朴にも誇張している。併し一二四〇年頃にイプル市が二十萬の人口を持つたという事は絶対にあり得ない事である。としても、確かな證據によつて、ガンやブルージュでは約五萬の人口がいた事は信ずるに足りよう。そしてこの人口數たるや中世人口について知られている所によれば極めて高い數字であつた。既にこの時代に於てシエルト河流域地方が、ヨーロッパに於ける最も人口密な地方としての今日の特徴を早くも持つてゐた事は殆ど確かである。

かかる大都市人口を養つて行く事は非常にデリケートな問題であつた。近隣の土地の産物は充分ではなく、不可欠の原料品を遠方から買入れねばならなかつた。十三世紀の中に無数の運河開鑿がフランダー地方に於て企てられてゐるが、これは商業運輸を助ける欲求と共に、右の必要に迫られたものである。正しく都市は外國の供給品に頼る事なしに生きて行く事はできなかった。そしてこの時以來、都市はその食糧をアルトワ Artois

及びバルチックから商業路でブルージユに運ばれた穀物に依存した。尤もフランダールの状態でもつて、ネーデルラントの凡てをはかるべきではない。ブラバント地方はほぼ同様な條件にあつたが、南ネーデルラントに於けるハイナウル Hamault 及び北ネーデルラントに於るオランダ Holland はそれと比較する事は出来ない。即ちハイナウルはただ二つの重要な都市のみを即ちツルネー、及びバレンシエンをもつのみであつた。又一方オランダに於ては十五世紀迄はユトレヒト及びザールツレヒトはフランダールの諸都市よりも重要性が少く、ブラバントやロットテルダムやアムステルダムは尚漁村にすぎなかつた。北ネーデルラントの經濟的擴張は、漸くブルグンディ時代に始つたのみで、中世期においてはマルギーの經濟的發展によつて、凡ての部門で押えられてゐた。

- 1) Gestes des évêques de Cambrai de 1092 à 1138, ed. Chr. de Smet, 122 seq. (1880)
- 2) H. Jenkinson, "William cade", in English Historical Review (1913), 209 seq. cf. ibid., Vol. xxviii, 522 and 730, and "A Moneylender's Bond of the Twelfth Century," in Essays offered to Mr. Poole (1927), 150 seq.
- 3) Essays in Mediaeval History presented to T. F. Tout, 113 seq.

五

都市の誕生は自然に農村に深い影響を及した。即ちそれは農村に全き變革をもたらし、その變革は都市生活が發展するにつれて益々急速且つ完全となつた。既に述べた如く、マナーの經濟組織は市場なき自給組織であつた。今日の歴史理論はそれを自然的乃至原始的な經濟からの退歩した組織ですらあつた。なぜならそれは商業を弱體化するものであつたからである。従つてかかるマナー經濟の消滅は當然商業的復活から結果せねばならなかつた。ローマ時代の終りから益々一般化した大土地所有制は農民を農奴の状態に陥入れた。世俗マナーにも、又宗教的マナーに於ても、そこには農奴がいて、領主の利益の爲慣習によつて定められた徭役及び背負い切れない程の義務に呻吟してゐた。マナー經濟の二つの特徴は、かくて自給生産と農奴制である。この兩者はやがて都市の發展によつて消失した。外部からの食糧で生活せねばならず、然も増々人口の増大してゆく都市の集中は、農奴の生産者に以前に求め得なかつた市場を與えた。農奴は彼等の生産物を確實に賣る事ができる様になつて利益を確保した。彼等はいも早や自分の爲にのみ働らかなかつた。彼等の莊園 mansi で生産した所の剩餘は近隣の都市民に賣られた。地代も相當にはね上り、耕作方法も改善されたが、しかし土地所有者はこの情勢の變化から利益をあげるよりも、損失の方が大きかつた。かくて農奴は今や豊かになり、逆に土地所有者は貧しくなつた。食糧品の價格の騰貴——それは需要の増加のみ

ならず、貨幣價値の下落によるものであるが、土地所有者に危機を齎らした。というのは地代収入が慣習的に固定されているのに對し、農奴を養う費用は斷えず上つたからである。この苦境を處理する爲に領主は二つの明白な方策をとつた。即ち一つは舊いマナー組織を放棄して農奴を解放し、これ迄固執してきた土地所有制度を修正して、新しい條件になつた關係に移す事、第二は耕地面積を擴大する事によつて資源を増大する事であつた。これらの移行はノルマン人の侵入によつて蒙つた災害の後、農業人口の増大によつて容易にされた。かかる増大は十二世紀の終りから觀察されるであらう。そしてこれに對する證據としては、一〇六六年のノルマン・コンタニストの後、マランダール及び英國の隣接地方から多數の人々が移住してきた事や、又第一回の十字軍に於けるベルギー人の夥しい参加によつても知られるであらう。十二世紀に於けるこの移住運動は、特にドイツに向い、オランダやフランダール人の植民者は低部エルベ沿岸の濕地帯を開墾する爲に出かけて行つた。<sup>2)</sup>しかし増大する人口は國內でその仕事を見つけた。即ち君主や大地主は海岸沿いの侵水地域の排水工事や、堤防工事に於て、又森林や荒蕪地の開拓業に於て人々のはげ口を與えた。十二世紀に、最初のホルダー Polder (海の水面より低い地を排水して耕作に供した濕地をいう。……小野註) がハイナウルやルクセンブルグの南方や、又キヤムパン Campine の砂地に於て見出される。又耕作面積がローマ時代の面積を越え始めたのはこの當時からである

H・ピレンヌに據る中世ノーデルラント經濟史の概観

つた。然も同時に自由が農民階級の間に廣がり始めた。舊い農奴制度は開墾を要した地方に來住すべき移住民の有利な際に廢止され、大所領に固執された農奴の痕跡も少しずつ消失した。十四世紀の初めにイーブルの町役人 (Gehovins) は「彼等は農奴の身分につらて全然聞いた事がなから」と斷言して居る。<sup>3)</sup>

1) R. H. Geoghe, "The Contribution of Planters to the Conquest of England," in *Revue Belge de philol. et d'hist.* (1936), 81 seq.

2) G. T. Lapsley, "The Flemings in England in the Reign of Henry II," in *English Historical Review* (1906) 161 seq.

3) J. W. Tompson, "Dutch and Flemish Colonization in Mediaeval Germany", in *American Journ. of Sociology*, Vol. xxiv (1918)

3) Bagnot, *Les Oïm*, II, 770.

## 六

この十三世紀の終りは、ほぼ三世紀前の商業復活と共に始つた經濟革命が、その頂點に達した時と考えられよう。その凡ての包芽はここに成熟し、社會の組織は變革された。今や十九世紀の産業革命の後に起つたのと同様な現象が現れた。即ち新しい分配の問題が富の繼續的増大の時期に續いて切實なものとなつた。然もその問題は經濟的進歩の急速であつた爲、愈々重大

なものとなつた。そして分配をめぐる争いがネーデルラント地方に於て特に烈しかつたという事こそは、この地方が隣接諸國に比して優位性を保つていた事を立證するもので、恰も英國が一八三〇年に於てヨーロッパの他國に對して有つた地位に似ている。この點でイタリヤのみが中世に於いて同様の姿を呈した。しかしその類似は基本的な點に於いてのみで、細い點ではネーデルラントは非常に異つていた。そして初期のこれらの相異を理解する爲には、ネーデルラント工業が本質的に輸出工業であつた事を想起せねばならない。デイナンの銅、フランダール及びブラバントの毛織物はその極く一部がその地方の消費にあてられる外は、凡て輸出の爲に製造され、その産業の重要性も外國貿易が發展するにつれて益々高まつた。そしてこれらの商品はブルージユから外國商人の手によつてヨーロッパ各地に益々廣く運ばれ、凡ゆる市場の商品の中に交つていた。

ネーデルラントの大マニユファクチュア中心地の職人と、西歐の殆ど全ての他の都市の職人との間の對照がどの様なものであつたかは容易に理解されよう。後者即ちヨーロッパの他の諸都市では、近隣のブルジョワジーや農民に制限された顧客の爲に働くのであつたが、ネーデルラントの職人達は國際的商業の爲に生産した。他の所では工業職人の數は市場の狭い事によつて制約されていたが、これに反してネーデルラントでは市場は無際限であつた。そこで職人の數は絶えず増大した。十三世紀の終りから、多くの人々はフランダールの主な大都市で毛織物工

業にたづさわり織布工、漂白工、剪繕工、染色工等になつた。そして、これらの職人の總計は、それ以外の職人の總計よりも多かつた。もし彼等の妻子を計算に入れるならば、彼等は總人口の半分以上を占めていた事になる。それ故これらの都市は十八世紀の終りの英國の工業都市の前兆ともいふべきものである。

職人の大部分は中世職人の古典的タイプと全く異つていた。即ち小さな獨立の親方が顧客の注文に應じて、自分の所有原料で製造し、利益をあげるのが古典的タイプとすれば、今のはこれと逆に、原料を與えて製品をうけとる親方の爲に、家内で働く單なる賃銀労働者(wage-earner)と見做されねばならぬ。勿論これらの賃銀労働者は同職組合を形成している點で近代のそれとは異つていた。彼等は雇用者の前に孤立してはいなかつた。しかしその事は輸出工業が明白に資本家的性格をあらわす事を阻げなかつた。そして職人達は彼等に原料を與え、賃銀を支拂う者に密接に依存していた。而もその依存關係は商人が職人とその經濟的震盪性によつて支配したのみならず、更に政治的權力で支配した事によつて益々増大した。凡ての都市に於いて都市行政は全く商人の手にあり、それ故に商人は易々と工業の統制規則を造り、法的にも事實的にも労働者を従屬させた。その状態は所謂 *bonnes gens*、即ち權力を奪つて利己的に用いた富商が、その獨占を強力に維持する限り續いた。しかし十三世紀の始め以來、この階級は恐るべき對抗者と絶えず戦わねばな

らなかつた。ネーデルラントの凡てのマニユファクチュア都市に於いて二つの黨派が即ち平Flan. Ar. A.民Her Bourghと貴Ar. A. G.族とし、豪者と富者と、ル悪クと善クとが戦つた。その反抗運動のリーダーであつた大工業の職人の周邊には、益々増大する貴族の排他性に對する反抗者のグループがあつまつた。即ち下層のギルド職人の他にも、富裕な市民層や又商人層でも獨占的な支配階級に不満を有する一部の者は、賃銀労働者達の反抗を支持した。かくて彼等はその賃銀の不足について、又親方の権力の濫用について、又支拂いや取引の偽贗について非難し、ストライキを起した。その最初のストライキは一二四五年にゾウアイで *hakenans* なる名稱で記録されている。一二七四年にギンの織布工や縮絨工が町役人 *schuyts* から課せられた規則に對する反抗から、都市を去つてブラバントに退き、そこで平民と貴族とはにらみあつた。リエージュの近傍でも同じ闘争が、*Dijle* と *«Hille»* との間に行われた。そしてデナンでは一二五五年に銅の鍛冶工が富裕階級に反抗した。

危機の大きさはそれを處理する爲にとられた手段から測り知られよう。貴族の町役人 *schuyts* はこの激しい反抗に對して自らも亦猛烈に防禦した。彼等は織布工や縮絨工が武器をもつたり、その道具を街頭に運んだり、七人以上が集會する事や、ギルドの仕事以外の事で會合する事を禁じた。違反した者には追放や死刑の如き嚴罰が課せられた。又彼等は他の都市と結んで他の都市に逃げこんだ隱謀職人の引渡し協定をむすんだ。しかしこれらの手段は社會的不安を増大するのみであり、かくて漠然たる共產主義的思想が、さいなまれた市民の間に漲まつた。その結果、一二八〇年にフランダール諸都市の全面に大暴動が起り、然もその暴動は密接な連絡の下に極めて急速にブルージュ、イーブル、ゾウアイ、ツルネイに廣まつた。フランス王の干渉はその危機を更に増大した。即ち一三〇二年のある夜、ブルージュの平民は、貴族がその助けを求めたフランスの騎士を虐殺した。そこで數ヶ月後の七月二日に端麗王フィリップ *Philippe le Bel* はこの侮辱をはらす爲軍隊を送つたが、殆ど毛織物労働者で殆ど擧成されたフランドル軍によつてクルトラー *Courtrai* の城壁下で破られた。この思いがけない勝利は工業職人に自己の實力を自覺させ、フランダールのブラバントやリエージュの地方で更に大一擧が起つた。それは社會的激情期の出発點であり、十五世紀の始め迄つづいた。かくてその時迄に都市に廣く行われていた富商政治 (*plutocracy*) は打破された。勿論過去の地位を回復せんとする貴族側での反動運動も行われたけれども、都市権力を得んとする平民の努力は、輸出工業が營まれた凡ての地方で多かれ少かれ完全に且つ急速に達せられた。尤も職人が権力の獨占を得た事は殆どなく、又あつたとしても極く一時的で、一段には都市の行政はギルド職人と貴族との間にたえず比重をかえつつ分たれた。そして殆ど何處でも、全市民を構成する各社會的グループの夫々に行政上の地位を與え、かなり公平に夫々の利害を代表させる事ができる様になつた。

しかしこの組織が諸黨派間の安定した平和な均衡を確保する事は遂にできなかつた事に注意せねばならない。この不安定の原因は、平民 common people の異質的構成に求められねばならぬ。パン屋、肉屋、鍛冶屋の如き下層職人 small craftsmen の利害が、輸出工業に於ける職人のそれと異つていたのみならず後者も更に對立したグループに分れ、織布工と縮絨工との間にも永年の血なまぐさい争いが周期的に繰り返えされた。貨幣問題に貴族の衰落によつても解決しなかつた。民主的の革命は資本家的に組織された工業を奪ひ取る事にならなかつた。又政治的權力の獲得は職人に經濟的獨立を與えず、彼等は依然賃銀勞働者であつた。その上彼等が地方的消費の爲でなく、輸出の爲に生産したといふことから、彼等自らの力では阻止したり、理解したりする事の出来なかつた國際商業的危機に翻弄される事になつた。彼等は貴族の支配からは免れた。しかし尙彼等に仕事を與える資本家的商人に従屬して<sup>(1)</sup>いた。彼等は少くともかかる仕事の獨占を保持せんとつとめた。そこで彼等はできるだけ完全に外的競争を打破しようと凡ゆる努力をばらつた。ガン、ブルージュ、イーブルではその周邊の隣人達を工業的獨占の極端な體制においた。軍事的遠征が村落を搜索する爲に組織され、農村に於ける毛織物製造のどんな道具も破壊した。小都市の工業は大都市によつても統制され、大都市工業は強權を濫發して「特權」の名の下に小都市工業が自己と同種類の毛織物製品を眞似する事を妨害した。同じような事例はミューズ地方でも目

撃される。即ちその頃はドイツ人とフランダース人の製銅工業をめぐつて激しく戦つたのである。

- 1) G. Espinas, "Jehan Boine Broke, bourgeois et drapier douaisien," Verteljahrschrift für Sozial und Wirtschaftsgeschichte (1904) フランズの毛織物工業は歴史の資料は G. Espinas 及 H. Pirame の資料集 Recueil de documents relatifs à l'histoire de l'industrie drapière en Flandre (1906—9), 4 Vols. フランズに關しては N. Posthumus, Bronnen tot de geschiedenis van de Leidse Textielnijverheid Vol. I. (1838—1480), The Hague, 1910. cf. N. Posthumus, De geschiedenis van de Leidse Laken-industrie Vol. I, The Hague, 1908, 及 G. Des Marex, L'organisation du travail à Bruxelles au XV<sup>e</sup> siècle, 186 seq., Brussels, 1904. ibid., "A charter of Louvain dated 1290."
- 2) Espinas and Pirame, Recueil, II, 21, 92, 94, 379 seq.
- 3) H. Pirame, Histoire de la constitution de la ville de Dinant au moyen-âge, 37 seq. (Ghent, 1889)
- 4) H. Pirame, Belgian Democracy, Its Early History (1915), 103 seq.

七

しかしこの氣狂いじみた保護主義も、都市の工業の衰亡を阻止する事はできなかつた。高率賃銀は織物の價格を高め、漸次



その實行きを減じた。同時に英國の羊毛は英國が十四世紀以來自ら毛織物工業を営むようになって以來、輸入が困難となり、値が上つた。この英國の恐るべき競争に對抗する爲には、今やスペインから羊毛を輸入し、マニユファクチュアの新しい方法を採用する新工業體制が必要であつた。しかるに職人は尙も、益々保護主義を強化することにのみ救いを求めた。彼等は特權の擴大の他何も信賴せず。情況が一層惡化すればする程益々排他的統制を強化したが、この事が事態を更に惡化するのであつた。十四世紀の終り頃、この近視眼的政策が非難された事は明白である。資本家の援助を得、且つフランダー伯に保護されて農村の毛織物工業は大都市の抗議にも拘らず、益々發展して都市工業の有力な敵となつた。それらは「特權」や支那から開放されて、自由に成長し、スペイン産の羊毛をもつて英本國の羊毛に代えた。然も低賃銀で満足し、輕くて安い材料の「セイ」の製造に専心し、漸次、舊型商品の上に基礎をおいていた都市の商業の地位を奪つた。ブルージュは益々國際的港になりそこで中繼貿易(Hub)が北方や南方から集る外國商人の手に集中した。イタリヤ商人がその主役を演じていたが、その外ブリトン人、ガスコン人、バスク人、スペイン人等も集つた。そしてそこに又、ドイツ・ハンザがその最も重要な基地を確立し、それを通して北方及びバルチック海と、他方地中海との貿易關係が保たれた。他方フランダーの海運業は十三世紀に於ては尙繁榮していたが、このブルージュの港では外國船に一步を

譲るに至つた。十四世紀の始めからジブラルタル海峽を通じて直接にやつてきたジノアやベニスガのガリー船はここで、ダンテヒからハンブルグ迄のドイツの凡ての都市の *ogers* (小舟) に出會つた。凡ての大取引 "*Jug. business*" は今やブルージュに集つた國際的客商の間で行われた。土着人自身は手數料業 (*commission agents*) としての外始と役割を演じなかつた。というのは取引規模が到底手におえない程のものになつたからで、以來めつきりと消極的性格を呈する様になつた。

十五世紀の始めにブルージュはその繁榮の頂點に達したが、その後は衰退の兆を示し始めた。殊にツヴァイン海灣の沈泥による淤塞は、十二世紀以來次第に惡化した爲、港はたえず下流に移動し、最初はダム *Damme* に、それからホック *Hock* に更にモニクリース *Monikreule* に、ついに最後にエクルーズ *Ecluse* に移つた。しかしエクルーズ自體はみせかけだけの町で、大きな船はゼーランド海岸上のラメケン *Rammekens* に投錨し、それから貨物を小さなボートで陸揚げせねばならなかつた。かかる物的條件の打撃と共に、時代遅れの傳統的經濟組織が尙根強く、新しい變化に應じ得なかつた。恰も、マニユファクチュア都市が、工業の新しい條件に順應し得なかつた如くに、商業に於ける新しい條件に順應する事ができなかつた。例えば彼等の不利な情況をよくする爲に自由にして柔軟な經濟制度をとつて外國商人を留まらせようとはせず、ただその貿易を擔取する事ばかりを回春の途と心得ていた。しかし中世に於てこそ如何

にも彼等を繁榮させたとはいへ、商業の量と激しさが増大して、既に陳腐となつてしまつた舊い統制組織の元でどうして生き永らえる事ができよう。彼等は外國商人がブルージュに出入する様に強制せんとした。そしてブルグンディ諸公から、ブルージュに居留し續ける義務を課する法令を得た。しかし諸公は彼等に望み通りの法令を與えたが、それによつて諸公自身の利益はたえず縮少していつた。即ち諸公自身の活動はアントワープの高まりゆく繁榮を促進する事に極度に獻げられたが、そこではブルージュとは著しく異つて、フランダールに於ける農村的毛織物工業の成功をあらしめた經濟的自由が、外國商人に對して斷えざる魅力をふりまいていた。然も陸地に深く入り込み、北海の海賊の危険からも充分安全であつたこの港の優れた地位は、ブルージュから外國商人を引寄せようと結合した所の者に他の利益を與えた。アントワープとブルージュとの間の對照は、過去と將來、特權と平等權、保護主義と自由貿易との間の對照であつた。ブルグンディ諸公はネーデルラントの諸公國 *principautés* を主權の下に連合した(一四一九—一四七七)が、彼等は中世から近代の經濟組織への移行を容易ならしめた。彼等は舊い政治的・經濟的特權に對して鬭争し、“private Good”に對する“common Good”の守護者たる事を正しく宣言した。彼等を鼓舞したものはも早や局地的利害ではなく、一般的利害であつた。オランダではドイツ・ハンザに對抗して、前途洋々たる海運發展運動を勢力的に支援したのも彼等であり、又凡ての

農村地方の爲に公益金融組織 (common monetary system) をめぐり、ガンヤイプルの壓迫に對して農村的毛織物マニエアンチユアを保護し、又ブルージュの反對に對してアントワープの商業を保護した。彼等の政權獲得はネーデルラント史の中世期の晩鐘であり、その後まずアントワープで、それから更に阿姆斯特ルダムでも上る近代の睡鐘である。

(1) H. Pirrenne, “Une crise industrielle au XVIIe siècle, La draperie urbaine et la nouvelle draperie en Flandre”, in *Bullet. de l'Acad. Royale de Belgique, Classe de Lettres*, 1905, 489 seq.

(2) W. Stein, Die Genossenschaft der deutschen Kaufleute zu Brügge (1890) K. Bahr, Handel und Verkehr der deutschen Hanse in Flandern während des XIV. Jahrhunderts (1911) ヘルシヤを南方の國々との關係に關する書は Gillhodes van Severen, Cartulaire de l'ancien Consulat d'Espagne à Bruges (1880-1885) (Bruges, 2 Vols., 1901-1902) 同く Cartulaire de l'ancien Consulat de Bruges (1904-1906), 4 Vols.

(3) ブルージュもフランダールの他の都市も、又ミルギーの諸都市もドイツ・ハンザに加盟していなかつたが、ただ唯一の例外はワイナンの Walloon 市で、それはドイツ商人が英國で享けた特權に參與せんが爲にハンザに加盟した。